農作業 テクニカル ダイアリー

Agricultural-work technical diary

イチゴ

やさいの里営農センター
営農指導員　宇井 文英

本圃の管理

定植後は十分な灌水により活着を促します。とちおとめは発根がやや遅いので、クラウン部が乾かないように1日数回、こまめな灌水が必要です。活着が遅れると初期の生育遅れにより、着花数の減少や収穫時期の遅れにつながります。

●天敵導入前の病害虫防除の徹底

被覆ハウスは湿度が低く、うどんこ病（写真❶）やハダニが発生しやすい条件となっているので、定植後から開花期までに徹底して防除しましょう（表❶、❷参照）。

●ハウス内の温度管理

花芽の分化時期までは十分な換気を行い、外気温に近づけます。日中は30℃以下になるように換気を行い、外気温の低下とともに日中25℃を目標に管理します。ハウス内温度が15℃以下となる10月下旬には、夜間は天窓やサイドも閉め、完全保温にします。これ以降の温度管理は日中25℃、夜間8℃を目標に管理を行い、11月まで日中の高温に注意しましょう。

出蕾・収穫開始期の管理

灌水は少量多回数を基本として、各花房出蕾時期はやや多めの灌水を行い、がく焼け果を防ぎましょう。週2回程度、少量灌水を行います。11月下旬以降、電照や炭酸ガスの施用により草勢を維持することで葉の展開を促進し、花芽の発育と出蕾を促して連続的な収穫を目指します。草勢が強い場合には、施用の開始時期を遅らせる必要があります。

表❶　うどんこ病に登録のある主な殺菌剤

薬剤名	使用倍率	使用時期	総使用回数	作用特性
ベルクートフロアブル	1000倍	育苗期（定植前）	5回以内	予防
フルピカフロアブル	2000～3000倍	収穫前日まで	3回以内	予防
アフェットフロアブル	2000倍	収穫前日まで	3回以内	予防
ガッテン乳剤	5000倍	収穫前日まで	2回以内	予防・治療
シグナムWDG	2000倍	収穫前日まで	2回以内	予防・治療
パンチョTF顆粒水和剤	2000倍	収穫前日まで	2回以内	予防・治療

表❷　ハダニ類に登録のある主な殺虫剤

薬剤名	使用倍率	使用時期	総使用回数	ミツバチ影響日数
コロマイト水和剤	2000倍	収穫前日まで	2回以内	1日
ダニサラバフロアブル	1000倍	収穫前日まで	2回以内	0日
マイトコーネフロアブル	1000倍	収穫前日まで	2回以内	1日
サンマイトフロアブル	1000～1500倍	収穫開始3日前まで	1回以内	4日
ダブルフェースフロアブル	2000倍	収穫前日まで	1回以内	1日
スターマイトフロアブル	2000倍	収穫前日まで	2回以内	1日

写真❶
イチゴのうどんこ病
（提供元：JA全農ちば）

夏ネギ

成東経済センター
営農指導員　内山 晃宏

栽培の現状

近年の夏ネギは、千葉県下で取り組みが行われている5月出荷の「プレミアム夏ネギ」をはじめ、販売環境が堅調であることから、早期出荷のトンネル栽培を中心に作付けが増加しています。

平成30年産の夏ネギを振り返ると、生育期間中は平年よりも気温の低い日が続きました。一方で、3月以降は気温が高めに推移したこともあり、全体的な作柄は平年並みとなりました。病害虫においては、春先からべと病やさび病・黒斑病が多発したため、次年度以降は被覆除去後、もしくは3月上旬以降の定期的な防除を心掛けてください。

注意が必要な病害虫

●萎凋病

トンネル被覆中や、気温の上昇する春先から被害が拡大します。発生初期は葉先の枯れが見られ、次いで株の萎縮に進み、最終的には枯死します。発病株の茎盤部は褐変し、根は脱落します。萎凋病の発生は軟腐病の併発へつながる恐れもあることから、定植前にトリフミン水和剤による防除を必ず行いましょう。

●べと病（写真❷）

べと病の発生初期は、圃場に中心葉だけが黄化した株が坪状に発生します。多湿を好み、20℃以下の気温で発生の危険性が高まるので、降雨や霧の発生した場合に被害が拡大します。降雨前には予防剤、降雨後には治療剤を散布し、発生初期の防除を行いましょう。

写真❷　ネギのべと病

●さび病

葉にオレンジ色のやや隆起した小型の斑点を生じます。さび病は感染から発病まで約2週間と潜伏期間が長いため、圃場の一部でも斑点を確認した場合は、すぐに治療効果のある殺菌剤に切り替えましょう。散布の際は薬量を多めにし、洗い流すように丁寧に散布します。

●白絹病

白絹病は高温、多湿時に多発します。発生源の菌核は浅い土壌中で越冬し、ネギの地際部から侵入して発病します。発病株は外葉から枯れあがり、ひどい場合は株の枯死に至ることもあります。圃場の排水対策を行うとともに、薬剤防除の際は、地際部に薬剤が届くように行うと効果的です。

●ネギアザミウマ・ハモグリバエ

5月中旬ごろからアザミウマによる食害が増加します。多発すると防除が困難なので、発生初期の防除を心掛けましょう。薬剤抵抗性を防ぐため同系統剤の連用を避け、ローテーション散布を行いましょう。

6月後半～7月にはハモグリバエの被害も発生します。発生が見られた圃場は5～6日間隔で薬剤を散布し、防除しましょう。

6月の分析経過について

		合計7点
残留農薬分析点数	多成分一斉分析	大玉スイカ …… 2点
		ハグラウリ …… 1点
		かぼちゃ …… 1点
		シシトウ …… 1点
		ばれいしょ …… 1点
		メロン（ちばエコ） …… 1点

※残留農薬分析において、基準値を上回る成分は検出されませんでした。

土壌診断点数 …… 合計97点